小児救急「少」医の苦悩

急病の子どもが全国どこでも救急医療を受けられる状況には、ほど遠いことがわかった。9月には岩手県一関市で、生後8カ月の男児がいくつもの救急病院に断られ、小児科医に診てもらえないままとなった。小児科医の待機をめざす現場では導水の試行錯誤が続いている。

山口

還暦の1人、連夜の当直

今年7月、厚生労働省のホームページに掲載された資料がある。昨年4月現在、各都道府県で実施されている小児救急態勢を表にまとめたものだ。

山口県の中心部をカバーする山口医療圏「小児科24時間365日当直施設」の欄に「1」とある。年間通じて小児科医が夜間、日祝日でも常駐している医療施設が一つあるという意味だ。

山口県の担当者に尋ねると、この医療施設は山口市にある山口赤十字病院で、4人の小児科医師が在籍している。今年7月から、県内三つの医療圏をカバーする拠点病院になったという。

4人だと月7回以上当直をすることになる。日中の外来をこなしたうえで、この当直回数をこなすのは困難だ。だが、県の担当者は「やっていただいています」。

ところが、赤十字病院の弥源治毅前事務部長（現嘱託）はこう切り出した。

「うちには特殊事情があるんです……」

どうやって回しているか。

「実は、今年還暦の医師が、小児科の診察室の一角に住み込んでいるんです。この先生がいなくなったら、とてもとても……」

この医師が連日、当直を引き受ける。間もなく定年を迎えるが、その後も嘱託で続けてもらうつもりという。

「労働基準法違反かもしれません。でも、矛盾した制度を作った国の責任です」

この病院は、ほかにも思わぬ障害にぶつかった。

現在の診療報酬制度は、開業医からの紹介や救急車で運ばれる患者を多く受け入れるほど、病院の収入が増える仕組みになっている。

ところが拠点病院になって、紹介状を持たない飛び込みの小児患者が増え、紹介率が減ってしまった。この加算が受けられない状況に追い込まれているという。

弥源治さんは「国の制度を受け入れて、かえって病院の経営が悪くなる矛盾だ」と語える。

輪番制がなかなか進まない現状を打開しようと、厚労省は今年度から複数の医療圏に1カ所、24時間対応できる拠点病院をつくる事業を始めた。

今年度中に50カ所つくる方針を打ち出していたが、手を挙げた病院はまだ10カ所にも満たない。

松本

輪番制、医師抜けて危機

10の医療圏に分かれる長野県は、松本医療圏だけが昨年から輪番を組んでいる。だが、国の補助金を申請していない。県の担当者が打ち明ける。「七つの病院で輪番を組んだが、それぞれの小児科医の数が少なく、いつ崩れるかわからないため」という。

案の定、先月、そのうちの一つ、相沢病院が抜けてしまった。一人だけの小児科医が別の病院に移ったためだ。急きょ、小児科医を募集したがだめ。小児科医体が休診に追い込まれた。

塚本建三事務局長は「小児科医を探すため沖縄にまで足を運んでいる。小児科医は過酷だ。ますます、なり手がなくなってしまう」。

輪番は残っているが、足切れは著しいという。

津軽

研修医多く、参加は困難

国立病院や大学病院、国立療養所などがありながら、輪番制のめどが立っていないのが青森県の弘前市を中心とする津軽医療圏だ。

昨年7月と今年9月の2度にわたり、県の小児救急医療対策協議会が開かれ、圏内の小児科医や開業医が集まった。しかし、結論は出ていない。

「国立の病院がそろっているのに、なぜ」と尋ねるが、県の担当者は歯切れが悪い。

「努力はしているところですが」

国立弘前病院5人、市立病院3人、津軽保健生活協同組合健生病院が2人。輪番制を担うであろう病院の小児科医の人数だ。合わせて10人。輪番制を無理なく進めるには30人以上の小児科医が必要というが、ほど遠い。

圏内には慢性疾患を診る国立療養所岩木病院があり、5人の小児科医がいる。和賀忍・小児科医長に疑問をぶつけた。

「輪番参加は？」

「奥歯にものがはさまった言い方だが、やれないわけではない。が、慣れないと急性期の患者を診るのは難しい」

弘前大医学部付属病院にも二十数人の小児科医がいるが、研修医や大学院生が10人以上を占める。付属移植の患者や心臓疾患の重症患者を抱えているため、スタッフが輪番制に参加するのは困難だという。

■小児救急の整備状況■

	24時間365日態勢	2次医療圏数	不完全な輪番制	未整備
北海道	1	21	1	19
青森	0	6	0	6
岩手	1	9	0	8
宮城	1	5	0	4
秋田	1	8	0	7
山形	1	4	0	3
福島	1	7	0	6
茨城	2	9	3	4
栃木	2	5	0	3
群馬	8	10	0	2
埼玉	3	9	0	6
千葉	5	8	0	3
東京	12	13	0	1
神奈川	10	11	0	1
新潟	1	13	0	12
富山	2	4	0	2
石川	1	4	0	3
福井	1	4	0	3
山梨	0	8	1	7
長野	1	10	0	9
岐阜	1	5	0	4
静岡	4	10	0	6
愛知	2	8	0	6
三重	2	4	0	2
滋賀	0	7	3	4
京都	3	6	0	3
大阪	8	8	0	0
兵庫	6	10	0	4
奈良	3	3	0	0
和歌山	0	7	0	7
鳥取	0	3	2	1
島根	2	5	0	7
岡山	4	7	1	2
広島	3	9	1	2
山口	2	6	2	4
徳島	3	5	4	0
香川	2	5	2	0
愛媛	2	6	0	4
高知	1	4	0	3
福岡	5	13	0	8
佐賀	0	5	0	5
長崎	1	9	0	8
熊本	1	11	0	10
大分	2	10	0	8
宮崎	1	7	0	6
鹿児島	1	12	0	11
沖縄	1	5	0	1
計	115	360	20	225

▶都道府県の救急医療担当者による

「頼の死生かして」携帯使い支援の輪

一関の乳児死亡　母の呼びかけに反響

小児救急の整備求め全国に7支部

岩手県一関市で先月、救急病院で診察を断られるなどして死亡した佐藤頼ちゃん（当時8カ月）の母親が、「署名に協力を」とネットで呼びかけた。携帯電話のiモードから発信された母親の声に、お互いの顔が見えない不安を抱えながらも、支援の輪は瞬く間に広がった。「頼ちゃんの死を無駄にしない会」が結成され、全国7カ所に支部ができた。小児救急の整備を求め、お母さんたちが立ち上がった。

母親の美佳さん(24)が、育児支援サイトで呼びかけたのは今月2日のことだ。

息子の死から1カ月。「あの日」のことを思い出すのはつらい。地元の市長にも小児救急の態勢整備を要望したが、反応はいま一つ。態勢整備は、国に働きかけねば動かない。

反響のメールが殺到したが、皆、疑心暗鬼だった。「本当に頼ちゃんのお母さんですか？」

美佳さんは疑問に一つひとつ答えていった。

「明日発売の週刊誌に載ります」「ワイドショーに出演する私はピンクのトップにジーパン」

一日中、携帯電話と格闘していた。

反応は次第に変わっていった。「メールをしているうちに心が通じました」。支援の声は大きくなり、具体的になっていった。「頼くんのママの住所を載せて返信用封筒を入れて送ればどうでしょうか」「署名用紙って統一じゃないとダメですかね」「各県代表者をつくってみては？」

多くの体験談も寄せられた。

「子どもが血混じりの吐をして救急病院に8件断られ、受け入れてくれたのは隣町の病院でした」

励ましのメールが相次いだ。携帯電話の番号を交換する人も出てきた。

延べ400通以上のやりとりを通じ、北海道から九州まで120人以上の会員ができた。北海道から九州まで7支部も出来た。

ところが最近になって、掲示板にいたずらの書き込みが殺到するようになった。

美佳さんは、会専用のホームページを立ち上げるつもりだ。

小児救急に関する体験談、ご意見などをお寄せ下さい。メール（syakai1@ed.asahi.co.jp）かファクス（03・3545・0285）で。

H14.9.19木
朝日(全国版)

診療断られ乳児死亡

岩手・一関 救急病院など次々に

岩手県一関市で4日、生後8カ月の男児が救急病院や総合病院など4カ所の病院で次々と診療を断られ、適切な処置を受けられないまま自宅で亡くなっていたことが分かった。県警は司法解剖して詳しい死因を調べている。

両親や病院などによると、男児は1日夜から発熱や呕吐(おうと)、下痢の症状に襲われた。2、3両日は、それぞれ市内の開業医で受診、解熱剤などを処方されたが、3日夜になっても症状は変わらなかった。両親は救急指定の一関病院に連絡。「眼科医しかいない」と言われ、市内の県立磐井病院に電話したが、応答はなかった。市内の別の総合病院に連絡したが「整形外科医しかいない」と断られた。

約30キロ離れた水沢市の総合病院にも連絡したが「近くの病院に行った方がいい」と断られ、午後9時すぎ、眼科の当直医しかいない一関病院に駆けつけた。男児の体温は40・8度で、激しい下痢を繰り返していたという。

眼科医に、2日前からの症状を訴えると、眼科医は非番の小児科医にポケベルで連絡しようとしたが、応答がなく、座薬と水分補給のブドウ糖注射を施しただけで帰宅させた。

4日午前7時20分ごろ、男児がぐったりしているのを両親が見つけ119番通報。一関病院に運ばれたが、すでに心停止状態で、心マッサージなどをしたが、助からなかった。

一関病院の加藤栄一院長は「小児科医に連絡が取れなかったことが悔やまれる」と話している。

両親は「どこが救急病院なのか。満足な処置も受けられずに死んでしまった。納得できない」と憤っている。